

ふたはの桂

京都府大広報 **No.176** | 2015.10

KYOTO PREFECTURAL UNIVERSITY



大学の森【生命環境学部附属演習林（久多演習林）】の風景

特集1 京都府立大学開学 120 周年を迎えて — 2

特集2 京都和食文化研究センターの取り組み — 4

CONTENTS

地域連携・地域貢献 — 6 国際交流 — 7 受賞情報 — 8 ニューフェース — 9
各学部・研究科の取り組み 文学部 — 10 公共政策学部 — 10 生命環境科学研究科 — 11
話題の研究 — 12 イベント情報 — 12



京都府立大学 120周年

特集1

京都府立大学開学 120 周年を迎えて

地域に学び、地域に応える、教育・研究の推進で地域創生に貢献

京都府立大学 学長 築山 崇

■大学改革のいま

京都府立大学が創立 120 周年を迎えた今、日本の産業を支える科学技術の高度化・国際競争力強化の“エンジン”として、大学改革がハイテンポで進められつつあります。また、大学に限らず今日改革の二文字が語られる時、グローバル化の視点が必須となっていますが、本学でも、グローバルつまりグローバル&ローカルな人材育成の新たな教育プログラムが始まっています。

■本学の個性を活かして地域創生に貢献

本学には、人文、社会、自然の3分野にまたがる基礎科学・応用科学の厚い伝統があり、多彩な学びから生まれる魅力的な個性が息づいています。さらに、下鴨キャンパスは、本学と植物園、総合資料館、コンサートホールなどから構成される北山文化環境ゾーンに立地し、相互の連携によって、地球環境や京都・日本の文化、地域づくりの課題などに応えて研究・教育を展開していく大きな創造的可能性をもっています。また、精華キャンパスを拠点とした新しい食糧生産技術の世界への発信と産学公連携の強化や、演習林を拠点とした北部での活動も期待されるところです。

本学における新しい動きとしては、時代が求める新たな教養教育の創造、和食文化に関する研究・教育、国際京都学の構築などがありますが、これらについては、紙幅の関係で本号の関連する紹介に譲りたいと思います。

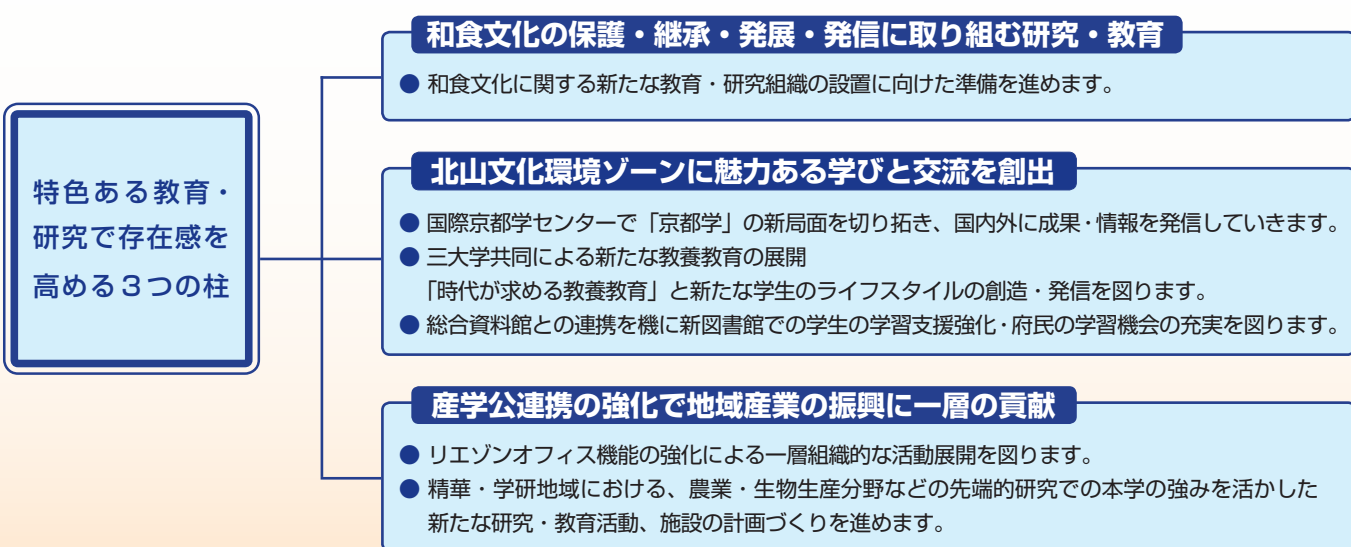
今後、流行のスタイルをなぞる底の浅いものではない、確かな学びに裏打ちされた活動を育てるべく、学生・教員・職員、そして地域をつなぐかたちをつくっていききたいと思います。



■学生パワーを前面に

最後に、今府大に生まれつつある変化、そして本学のイメージを一新し活力を高める鍵のひとつが、大学づくりへの学生参画にあるということ、ぜひ加えておきたいと思っています。高い能力、堅実さが府大学生の従来イメージでしたが、「府大、変わったね。面白そう!」、そんな声が地域で聞こえ、やがて全国へ・世界へと広がっていく。121年目の京都府立大学に託したい夢です。

《next ビジョン》 躍動する府立大学



開学 120 周年記念イベント

開学 120 周年を記念して、今秋 11 月 14 日・15 日、学園祭である「流木祭」(なからぎさい) に合わせ、記念式典や各種記念イベントを開催する予定にしています。

記念式典は、14 日午前 10 時 40 分より稲盛記念会館において举行します。14 日午後 3 時からは合同講義室棟において記念講演会を行います。講師は、本学卒業生で、ソフトバンク株式会社代表取締役社長兼 CEO の宮内謙氏にお願いしています。講演にはこの夏ソフトバンクが発売を開始した今話題の感情認識パーソナルロボット Pepper (ペッパー) も登場し、講演を盛り上げてくれる予定になっています。記念講演会の後にはレセプションも開催する予定です。

これらの他に開学 120 周年記念企画として、映像と写真で府大の歴史を振り返る「思い出上映会」、現役学生や同窓生等の交流空間である音楽バー「たむろば」強化版等を予定しています。開催時間や開催場所などの詳細に関しましては、別途大学ホームページをご覧ください。(http://www.kpu.ac.jp/link/120events.html)



京都府立大学 120 周年記念事業募金を募っています。趣旨にご賛同いただき、ご協力を賜りましたら幸いに存じます。詳しくは、大学ホームページをご覧ください。(http://www.kpu.ac.jp/link/120bokin.html)

京都府立大学 120 周年記念事業実行委員会会長 浅井 学



120 周年記念ポスター

(イラストは本学環境・情報科学科卒業生の多田昭彦氏)

新たなステージへ！

時代が求める新たな教養教育の創造

本学と京都工芸繊維大学、京都府立医科大学の京都三大学は、3 大学が共同することによって、時代が求める新たな教養教育を構築していくため、平成 26 年度から全国初となる教養教育共同化をスタートさせました。これにより、学生が選択できる科目の幅は大きく増加しました。

様々な学問分野の基礎を幅広く修得し、世界の人々の多様な生き方を感じ、真理や正義を探究する議論に習熟する人間性豊かな学生が育ってほしいとの願いを込めて、人文系、社会系、理工系、医学系と専門分野の異なる学生が混在して学ぶ学修空間が創り出されました。こうして、北山文化環境ゾーンに学びと交流の共同の場が築かれつつあります。

新たな文化・学術の交流・発信拠点へ

文学部、附属図書館と新京都府立総合資料館の合築棟の建設が進められています。

京都の文化や歴史を研究する「国際京都学センター」も併設されることとなり、完成すれば、京都府立大学と京都府立総合資料館とも連携し、文化・学術の交流・発信拠点となります。

(右図：合築棟のイメージ)



新たな教育プログラムによる人材育成

グローバル人材育成プログラム

京都初・京都発 グローカル人材のための資格「Glocal Project Manager」

地域社会を支える公共マインドとグローバル経済に冷静に対応するビジネスマインドの双方を兼ね揃えたグローバル人材を育成するために、グローバル人材のための資格 Glocal Project Manager (GPM) を開発し、平成 27 年度から、その資格取得を可能にする「グローバル人材資格プログラム (GPMプログラム)」をスタートさせました。

大学で用意する体系的な教育プログラムに、企業と連携した課題解決型学習である PBL (Project Based Learning) を組み込むことで、大学だけでは得られない実践力が身に付くプログラムとなっています。

国際京都学プログラム

京都府立大学文学部の特色を活かした「京都文化のグローバル人材の養成」

文学部では、国際的な視野、優れた研究能力、豊かな学識を有し、国際化に対応するとともに、京都の地域社会や教育・文化交流に貢献できる人材を育成することを目標として、平成 28 年度からフィールド科目を特色とする必修の「国際京都学プログラム」を開設することとしています。

特集2

京都和食文化研究センターの取り組み

和食文化の保護・継承・発展のために

■ センター設置の目的

平成25年に「和食：日本人の伝統的な食文化」がユネスコ無形文化遺産に登録されたことを契機に、京都府では和食の文化を保護・伝承・発展させ、世界に発信してゆく取り組みをしています。

京都府立大学では、こうした取り組みの一翼を担い、京都府ならびに和食の最前線で活躍されている企業や関連団体と連携し、和食文化を担う中核的な人材の育成を図り、世界への発信拠点機能を有する「和食文化の高等教育機関」の設置を図っています。

■ 体制

センター教員

- センター長 田中 和博 京都府立大学副学長
京都府立大学大学院生命環境科学研究科教授
- 副センター長 東 あかね 京都府立大学大学院生命環境科学研究科教授
- 特任教授 日比野光敏 専門分野：日本の食文化、すし文化
- 特任教授 山下満智子 専門分野：調理学（日本の家庭食）

客員教授 (五十音順)

- 熊倉 功夫 一般社団法人和食文化国民会議会長、
静岡文化芸術大学学長
- 杉本 節子 公益財団法人奈良屋記念杉本家保存会常務理事兼事務局長
- 田中 延子 公益財団法人学校給食研究改善協会理事
- 筒井 紘一 一般財団法人今日庵文庫長、茶道資料館副館長
- 仲田 雅博 学校法人大和学園京都調理師専門学校校長
- 村田 吉弘 特定非営利活動法人日本料理アカデミー理事長

■ センターの機能と取組

学ぶ 和食文化に関する教育

和食文化の担い手となる人材を育成するため、既存科目【文学・歴史】【栄養・食品】【農学】【法律・経済・政策】に新しく【食文化】【歳時記】【茶・華道】の科目も組み合わせた学部横断プログラム「和食の文化と科学」を開講しています。

学部の枠組みを超えて、すべての学生が和食文化を学ぶことができます。科目等履修制度を利用し、府民ならびに社会人のみなさんも受講することができます。

深める 文理融合型の学際的な研究

和食文化の保護、継承および発展を目的とした、和食文化に係る学際的な研究を行っています。京都府立大学地域貢献型特別研究（ACTR）を活用し、京都の食文化についての調査・研究を進めます。

広げる 学外組織・機関等との連携

和食をテーマに、京都府、市町村、農林水産業、社寺、伝統芸能・工芸団体、茶・華道団体、食関連団体、食と農に関する教育機関等と連携します。また、和食文化に係る第一線の講師を招き、平成26年度から京都「和食の文化と科学」リカレント学習講座を開講しています。

リカレント学習講座

和食文化をより深く学ぶための連続講座（全5回）です。今年度は、和食文化の大切な要素である宗教、伝統の保持、健康、お酒、料理について学びます。（写真：平成26年度のリカレント学習講座の様子）



<平成27年度開講予定> ※今年度の申込みは終了しています。

	テーマ	講師
第1回	今、食を問い直す	山折哲雄氏 (国際日本文化研究センター 名誉教授)
第2回	和の文化を守る力	冷泉貴実子氏 (冷泉家時雨亭文庫 常務理事) 日比野光敏 (京都和食文化研究センター 特任教授)
第3回	脳科学から見た和食と健康	川島隆太氏 (東北大学加齢医学研究所 所長) 山下満智子 (京都和食文化研究センター 特任教授)
第4回	京の酒、世界の酒	増田徳兵衛氏 (株式会社増田徳兵衛商店 代表取締役社長) 増村威宏 (京都府立大学教授)
第5回	京都の料理 ハレの料理とケの料理	栗栖正博氏 (日本料理アカデミー 副理事長) 東あかね (京都和食文化研究センター 副センター長)

和食文化の高等教育機関開設に向けたキックオフ 共同記者会見及びキックオフセミナーを開催

平成27年9月7日、京都を代表する料理界の方々や協力企業との連携を一層強化し、取り組みを加速させるため、山田啓二京都府知事、一般社団法人和食文化国民会議会長の熊倉功夫氏らの立会いのもと、共同記者会見及びセミナーを開催しました。

共同記者会見

「和食文化の高等教育機関」開設に向け キックオフ共同記者会見とキックオフセミナー



共同記者会見には、大阪ガス株式会社から小西 雅之（こにし まさゆき）常務執行役員京滋地区総支配人、カゴメ株式会社から西 秀訓（にし ひでのり）代表取締役会長、キッコーマン株式会社から堀切 功章（ほりきり のりあき）代表取締役社長、特定非営利活動法人日本料理アカデミーから村田 吉弘（むらた よしひろ）理事長、立会人として、山田 啓二（やまだ けいじ）京都府知事、熊倉 功夫（くまくら いさお）和食文化国民会議会長、そして本学から築山学長が登壇されました。

この中で、大阪ガスの小西氏は食分野を間接的にフォローしてきたスタンスを今後も通したいと強調されました。カゴメの西氏はかつて九条ネギの消費拡大に貢献した経験から、同様の活動で京都産ブランドの名を上げたいとお言葉。キッコーマンの堀切氏は和食文化の高等教育機関で学ぶ学生が専門領域にとらわれず幅広く和食文化を学びグローバルに活躍することを期待し応援したいとご支持をいただき、日本料理アカデミーの村田氏も、本学の姿勢を大きく評価され、学生たちに次の世代に広がる叡知を与えてほしいと要望いただきました。

山田知事は、和食ブームによる盛り上がりを一過性に終わらせないために、府立大学で和食文化を担う中核人材を育成することは重要であると指摘されました。熊倉氏も、和食を文化として位置づけるには高等教育機関の開設は不可欠であると応じ、これを受けて築山学長は、「和食文化学」を学べる大学は日本でも前例がなく、まったく一からのスタートであるが、現行の中期計画期間内での開設を目指したいと抱負を語りました。

京都和食文化研究センターの教員のご紹介に続いて、京都料理芽生会会長で木乃婦三代目主人の高橋拓児氏による大学で和食を学ぶ意味についてのミニトークが行われました。

高橋拓児氏によるミニトーク

高橋氏はこの春、京都大学大学院農学研究科で修士課程を修了されました。当初は、研究内容が食に直接関係するののか戸惑いがあったそうですが、見方を変えると、実は食（和食）を捉え直す上でたいへん有効であったことを、臨場感たっぷりに語られました。また、京都府立大学では和食の文化的側面の教育・研究が主題となるであろうが、今までになかったような捉え方で料理や食の世界を見直すことが期待されると、自身の持つ夢も話してくださいました。



セミナー「和食文化の高等教育機関への期待」

セミナーでは、「和食文化の高等教育機関」への期待をテーマに、熊倉氏、堀切氏、村田氏に登壇いただき、築山学長をコーディネーターとして、活発な意見交換が行われました。

築山学長の「和食文化を勉強した学生は、和食の発展のためどのような貢献ができるか」という問いに対して、堀切氏は「学生は大学教育の中で得たネットワークが武器」と述べると同時に、学際性豊かな和食の学部ができれば、国際的にも注目されると期待感を表されました。村田氏も、料理技術だけではなく、その背景が分からなければ次の発展はできない。それを裏支えるのは、和食を科学的かつ文化的に学ぶことだと、期待感をにじませられました。



熊倉氏は、今、食文化が注目される一方で、まだまだ学問分野としては確立しておらず、「和食文化の高等教育機関」を設置し、学問としての体系化を成し遂げることが必要不可欠であると指摘されました。そして、京都府立大学には、和食文化を学問として飛躍させる研究基盤があるのではないかと期待を示されました。

築山学長は「学部学科の開設までにはさまざまな課題があるが、本日いただいたご期待を糧に頑張りたい」と皆さまの意見をまとめ、セミナーは終了しました。

センターでは、戴いた言葉のひとつひとつを真摯に受け止め、和食文化の高等教育機関開設に向けて邁進してまいりたいと考えています。

地域連携・地域貢献

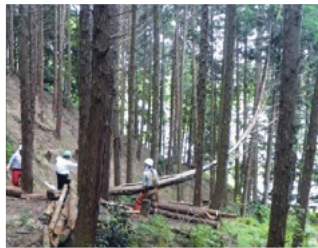
■大学の森（附属演習林）における学外連携の取組

本学には京都府内の6カ所に大学の森があります。最も古い大枝演習林は113年目を迎える日本で3番目に古い演習林です。他にも、講義室や宿泊施設を備える大野演習林など、それぞれの特色があり総面積は710ヘクタールに達しています。

演習林の目的は主に二つあります。一つは教育研究のための施設として、もう一つは地域貢献のための開かれた施設としての位置づけです。後者の取組として、公開講座等のほか、公的機関及び法人等による林業の担い手育成及び森の手入れ体験などについても受け入れています。今年度から実施した新たな取組も加え、3つの学外連携の事例を紹介します。

【公益社団法人京都府林業労働支援センターとの取組】

6月23日（火）～26日（金）に府内で初めて大学の演習林（大枝）で新たに林業への就業を希望する方々を対象として、間伐*等の森林整備の実地講習が実施されました。13名の講習生は、森林整備の道具類の使用方法及び安全対策を学び、間伐木の選定から造材までの作業を実践し、大いに汗を流され技術を習得されました。



*間伐とは樹木が混みすぎて森林が不健全になるのを防ぐ木を切る作業

【NPO 京都海外協力協会との取組】

8月1日（土）～2日（日）に大野演習林でNPO 京都海外協力協会会員及びその家族の方々を対象として、炭焼き体験会を実施しました。53名の参加者は、真夏日となったにもかかわらず、演習林に設置する炭化炉で竹炭を焼き、まさに暑い2日間となりました。その結果、土のう袋で20袋を超える竹炭ができ、国際交流ふれあい農園収穫祭等で使用される予定です。



【公益社団法人京都モデルフォレスト協会との取組】

8月9日（日）に府内で初めて大学の演習林（大枝）で京都モデルフォレスト協会の親子を対象とした「子供夏休み森林教室@大学の森」が実施されました。本学の学生森林ボランティアサークル「森なかま」の間伐実演では、15名の参加者から大きな歓声とともに拍手をいただきました。子供たちの枯れ枝を切る体験では、「もっと切りたい」との声に応じ時間を延長するほどでした。



これらの森林体験や実習等が子供たちの健やかな成長を促すとともに、一人でも多く林業に従事し地域に密着され、地域振興につながることを願ってやみません。

■京都府立大学地域連携センター学生部会かごらより ―活動紹介と参加のお誘い―

私たちは京都府立大学地域連携センター学生部会かごらです。京都府立大学の学生と地域の方々が繋がる架け橋になることを活動目的としています。

かごらの活動を学内でも広く知ってもらうため、4月の大学の新歓夜祭で、私たちは無料で飲み物やお菓子を提供する「かごらカフェ」を出店しました。入学間もない1回生に京都府立大学について教えたり、また質問に答えたりしました。大学生活に慣れない新入生の相談にのりながら、楽しい時間を過ごし、彼らの緊張を解く一助となれたように思います。

地域交流を目的とした「かごらカフェ」は、継続的に開催しています。1か月に一度、大学内で地域の高齢者の方たちが集まれる場所として開催し、ゲームをしたり、音楽系統の他サークルさんの演奏会を見ていただいたりして、地域の方と大学との交流を深めています。最近では来て下さる地域の方も増えてきており、嬉しい悲鳴を上げています。また、7月には、北山の歴史を題材にしたゲームを行い、来て下さった方から好評の

声をいただきました。これからも月に一度「かごらカフェ」を開いていきますので、お気軽にお立ち寄りください。

私たちは成立3年目ということでまだまだ至らない点も多々ありますが、大学と地域の方たちを結びつけることができる活動をこれからも行っていきたいと思っています。

部長 K. S（公共政策学部 公共政策学科2回生）

※「かごら」という名前は、京都府立大学のロゴマークのモチーフになっている「かつら」（桂の葉）とギリシャ語で広場や人の集まる場所を意味する「アゴラ」を合わせた言葉です。「京都府立大学の学生と地域の人々が集まって一緒に活動したい」という私たちの目標を表しています。

■丹波地域の魅力を発信！ 京都丹波・写ガール隊

京都丹波・写ガール隊（以下、写ガール隊）は、一昨年より京都丹波地域のあらゆる観光スポットや地域のイベントに本学公共政策学部の公共政策実習Ⅰ及び専門演習Ⅰという講義の一環で参加し、女性目線で写真を撮ってFacebookに投稿し、京都丹波の魅力を発信する活動をしています。また、年3回ほど一般公募者向けに、女性目線で京都丹波を観光するツアー「女子力アップツアー」を実施しています。

今年度の上半期には、写ガール隊員のみで京都丹波勉強会ツアーを実施し、隊員自身が京都丹波の知見を深めました。また、南丹市のトライアスロンイベントに参加した際は、イベントの状況をリアルタイムでFacebookに投

稿したり、選手を全力で応援したり、地域の情報発信と盛り上げ役として頑張りました！そして、写ガール隊結成3年目にして、広報雑誌「るるぶ」の亀岡版に載せてもらいました。（亀岡るるぶは10月発売予定なので、ぜひご覧ください。）

亀岡市観光マスコットキャラクターと写ガール隊

今年度下半期の取り組み予定としては、上半期に行った勉強会ツアーをいかし、一般公募者向けの「女子力アップツアー」の実施を計画しています。また京都丹波食の祭典である「京都丹波 EXPO」に参加し、京都丹波の情報を沢山発信していく予定です。

これからも公立大の学生・女性・若者視点を強みに京都丹波の魅力アップに貢献していきたいと思っております。

京都丹波・写ガール隊 隊長 N. Y（公共政策学科3回生）

国際交流

■陝西師範大学（中華人民共和国）と学術交流協定を締結

2015年5月12日、陝西師範大学から4名の代表団が本学をおとすれ、学術交流協定を締結しました。調印式では、本学の築山崇学長と陝西師範大学の蕭正洪副学長が大学間の交流協定書に署名し、さらに渡邊伸文学部長と蕭副学長が「国際京都学」と「国際長安学」の共同研究に言及した覚書に署名しました。



調印式（2015年5月12日）の様子
（左）蕭正洪副学長（右）築山学長

陝西師範大学は、中華人民共和国陝西省西安市に所在する教育部直属の大学で、「211工程」（21世紀にふさわしい大学100校）と称される重点大学にも選ばれた、中国西北地区を代表する大学です。すぐれた教育大学であるとともに、文理にわたる幅広い領域の学部を擁する総合大学でもあることから、さまざまな分野で本学との交流が展開していくことが期待できます。

今回の協定に先立ち、2012年12月に京都府立大学地域貢献型特別研究（ACTR）の一環として、陝西師範大学の研究者4

名を招聘し、「国際京都学シンポジウム—ユーラシアからみた京都—」を開催しました。国際長安学のプロジェクトを推進する陝西師範大学の側から国際京都学に対して建設的な意見が出され、両者間の研究交流を継続的に進めていくことで合意しました。その後、2014年11月には、本学の代表団6名が陝西師範大学を訪問し、「長安学と古代都城国際学術研討会（長安学と古代都城国際学術シンポジウム）」に参加して講演と報告をおこなうなど、研究交流を積み重ね、友好関係を築いてきました。



陝西師範大学でのシンポジウム（2014年11月）の様子

こうした交流実績と友好関係を基礎とし、全学規模で研究者や学生の交流を進め、国際京都学をめぐる研究をさらに発展させていきたいと考えています。

文学部 歴史学科 向井 佑介 准教授

■マケレレ大学（ウガンダ共和国）と学術交流協定を締結

本学生命環境科学研究科は、ウガンダ共和国のマケレレ大学獣医畜産防疫学部と2015年9月15日、学術交流に関する協定を締結しました。

マケレレ大学は、1922年にウガンダ技術学校として開学したアフリカで最も古い高等教育機関の一つです。今回、協定を

締結した獣医畜産防疫学部は、1949年に設立され、これまでに1,000名近い獣医師を排出。東アフリカを中心に畜産の振興と野生動物管理に貢献しています。

今回の協定締結により、貴重な野生動物の管理に関わる共同研究が推進されることが期待されます。

受賞情報

生命環境科学研究科 応用生命科学専攻

博士後期課程2回生 深田 史美さん(植物病理学研究室)
菌類遺伝学会「優秀ポスター発表賞」受賞

「*Colletotrichum orbiculare* regulates cell cycle G1/S progression via two component GAP and GTPase to establish plant infection」の発表により、第28回菌類遺伝学会「優秀ポスター発表賞」を受賞しました。 ※受賞時：博士後期課程1回生

博士後期課程2回生 小川 真実さん(植物病理学研究室)
日本植物病理学会「学生優秀発表賞」受賞

「*Colletotrichum orbiculare* species complex に属する炭疽病菌の細胞学的核型解析と宿主特異性の検討」の発表により、日本植物病理学会創立100周年記念大会において「学生優秀発表賞」を受賞しました。 ※受賞時：博士後期課程1回生

博士後期課程1回生 畑澤 幸乃さん(分子栄養学研究室)
Asian Congress of Nutrition Young Investigator Award 受賞

「PGC1 α regulates BCAA metabolism in the skeletal muscle」の発表により、12th Asian Congress of Nutrition (第12回アジア栄養学会)において、Young Investigator Award を受賞しました。

博士後期課程3回生 吉村 亮二さん(分子栄養学研究室)
博士前期課程2回生 加茂 翔伍さん(機能分子合成化学研究室)

日本農芸化学会関西支部例会
「若手優秀発表賞」「賛助企業特別賞」受賞

日本農芸化学会第489回関西支部例会において、吉村亮二さんが「転骨格筋特異的 PGC1 α 遺伝子欠損マウスの骨格筋、肝臓における分子鎖アミノ酸摂取の影響」の発表により「若手優秀発表賞」、加茂翔伍さんが「Juglorubin 及び関連天然物の全合成研究」の発表により「賛助企業特別賞」を受賞しました。

博士前期課程2回生 田代 有希さん(土壌化学研究室)、
中尾 淳助教、矢内 純太教授
微量元素の生物地球化学に関する国際会議「ポスター賞」受賞

「日本の水田土壌における粘土画分の放射性セシウム保持能と粘土鉱物種との関わり」の発表により、第13回微量元素の生物地球化学に関する国際会議において、「ポスター賞」を受賞しました。

中尾 淳助教(土壌化学研究室)
一般社団法人日本土壌肥料学会「奨励賞」受賞

「土壌による放射性セシウム固定の規定要因解析とその応用に関する研究」の発表により、一般社団法人日本土壌肥料学会「奨励賞」を受賞されました。

大島 一正助教(応用昆虫学研究室)
日本昆虫学会「若手奨励賞」受賞

「ホストレートをを用いた植食性昆虫の進化遺伝学的研究」の発表により、日本昆虫学会「若手奨励賞」を受賞されました。

博士前期課程1回生 太田 芳裕さん(機能分子合成化学研究室)
有機合成若手セミナー「ポスター賞」受賞

「キラルオリゴナフタレン類を用いた動的超分子の濃度依存的な高次構造体の形成」の発表により、第35回有機合成若手セミナー「ポスター賞」を受賞しました。

生命環境科学研究科 環境科学専攻/生命環境学部 森林科学科

平成27年3月博士前期課程修了 宮田 綾子さん(森林資源循環学研究室)
International Symposium on Wood Science and Technology 2015 (AWPS 2015)「優秀ポスター賞」受賞

「Reaction of cellulose as treated with pyridinium-based ionic liquids」の発表により、International Symposium Wood Science and Technology 2015 (IAWPS 2015)において「優秀ポスター賞」を受賞しました。

平成27年3月森林科学科卒業 稲葉 季詩子さん(受賞時：4回生)、
博士前期課程2回生 田井 駿一さん(同：1回生)、
大越 誠名誉教授(同：教授)、
古田 裕三教授(同：准教授)(生物材料物性学研究室)

日本木材学会大会「優秀ポスター賞」受賞

「若年者、高齢者における塗装木材の視覚・視触覚による官能評価～針葉樹材と広葉樹材の官能特性の比較～」の発表により、第65回日本木材学会大会において「優秀ポスター賞」を受賞しました。

平成27年3月生命環境学部森林科学科卒業 上野 操子さん(受賞時：4回生)
日本森林学会大会「学生ポスター賞」受賞

「航空機LiDARによる樹冠傾斜角を利用した単木抽出の試み」の発表により、第126回日本森林学会大会「学生ポスター賞」を受賞しました。

生命環境科学研究科 環境科学専攻/生命環境学部 環境デザイン学科

檜谷 美恵子教授(居住学研究室)
都市住宅学会賞論説賞 受賞

共同執筆者とともに、公益社団法人都市住宅学会の総会において、2015年都市住宅学会賞論説賞を受賞されました。(受賞された論説は次のとおり)
フランス・イタリア・イギリスのマンション管理制度とその運用実態
米国(カリフォルニア州)のマンション管理制度とその運用実態
オーストラリアのマンション管理制度とその運用実態
シンガポールのマンション解消・敷地一括売却制度とその運用実態

博士前期課程1回生 小仲 美穂さん(環境心理行動学(建築環境工学)研究室)
人間・環境学会「第22回大会発表賞」受賞

「住宅の窓が居住者に与える心理的効果に関する調査研究－重要性・満足度評価の居住形態別比較－」の発表により、人間・環境学会(MERA)「第22回大会発表賞」を受賞しました。

環境デザイン学科4回生 太田 奨吾さん(建築意匠学研究室)
インテリアプラン・コンテスト「優秀賞」受賞

「かべからつながるすまい」の発表により、第8回インテリアプラン・コンテスト(主催：インテリアプラン・コンテスト実行委員会)において「優秀賞」を受賞しました。
※受賞時：3回生

環境デザイン学科1回生 新貝 賢二さん
学生ビジネスプランコンテスト「努力賞」受賞

「匝庭 ~hako-niwa~ あなたのベランダへ、庭とどけます。」の発表により、第12回学生ビジネスプランコンテスト(主催：一般財団法人学生サポートセンター)において「努力賞」を受賞しました。

公共政策学部

公共政策学部 杉岡ゼミの学生チーム

「第9回全国大学まちづくり政策フォーラム in 京田辺」優秀賞等 受賞

「第9回全国大学まちづくり政策フォーラム in 京田辺」(主催：全国大学まちづくり政策フォーラム in 京田辺実行委員会)において、Bチーム(4回生の山本大介さん、島崎梨奈さん、田中成美さん、西村豪志さん、森悠さん)が「京田辺における地域交流拠点としての「まちの駅」の提案」の発表により「優秀賞」を、Aチーム(4回生の小牧満也さん、伊藤望さん、清水美優さん、藤本香さん、森本啓介さん)が「80点から100点へ〜政策フォーラムをより良いものに〜」の発表により「NPO 法人政策マネジメント研究所賞」を受賞しました。

※受賞時：3回生

京都丹波写ガール隊(公共政策学部 杉岡ゼミ)

武田 さつきさん、山村 彩衣佳さん、水相 真波さん

「京都丹波観光プランコンテスト」優秀賞 受賞

京都丹波写ガール隊(公共政策学科3回生の武田さつきさん、山村彩衣佳さん、2回生の水相真波さん)が「京都丹波観光プランコンテスト」(主催：京都府南丹広域振興局)において、「日本酒飲んで女子力アップ! 酒ガールツアー!」の発表により、「優秀賞」を受賞しました。

ニューフェース

平成27年4月1日着任の教員紹介



文学部 欧米言語文化学科
講師 細越 響子(ほそごし きょうこ)

〈主な研究領域〉
学術目的の英語(EAP)、アカデミックリスニング、タスク重視の言語教育

学術目的に資する英語運用能力の育成に関心を持ち、特に英語講義を素材とした聴解学習における教育効果の高い足場かけの手法を研究しています。具体的には、講義の構成や関連語彙の事前学習や、講義視聴中の字幕の使用言語の比較検証などを行ってきました。国内外へ積極的に発信できる人材の育成を目指し、「学術目的の英語」の高い要求と日本の大学生の英語運用能力との乖離を埋めるための体系的な指導法を追究していきたいと考えています。

公共政策学部 公共政策学科
准教授 玉井 亮子(たまい りょうこ)

〈主な研究領域〉
政治学、行政学

フランスの公務員制度について研究を行っています。フランスの公務員は行政組織内での活動だけでなく、特に国家公務員の場合、公務員の身分を保持しながら政治家になったり、企業で勤めたり、とそのキャリア・パスは多種多様です。そこで公務員の人事システムから見たフランスの政治や行政の様相について検討しています。また自治体職員の任用と自治体の政策パフォーマンスの関係について分析を行っており、そこからフランスの地方分権化政策の実態の解明や日本への示唆を得たいと考えています。



公共政策学部 公共政策学科
准教授 松岡 京美(まつおか きょうみ)

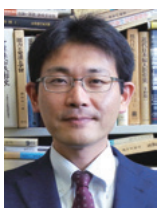
〈主な研究領域〉
公共政策、政治過程、政策文化

地域振興政策を進める行政の行動の仕方を、日本発祥の一村一品運動や甚大な被害をもたらした東日本大震災を事例に分析してきました。それは、政策実施の動態を比較政策文化アプローチで明らかにする政策科学研究です。今後は、公共政策についての新たな実証的な行動論研究を目指して、世界が直面している洪水災害と高齢化社会をさらに事例に加えて、政策の開始から終了に至る政策過程における行政進展に注目した研究を行います。

公共政策学部 公共政策学科
講師 松田 貴文(まつだ たかふみ)

〈主な研究領域〉
契約法、任意法規論

法律と聞けば、我々の行動を制限するものというイメージがあるかもしれませんが、契約法の多くの規定は、当事者が自由に変更することができる任意法規と理解されています。なぜ当事者が自由に変更することができるのか、なぜ契約法においてそのような規制手法が用いられているのか。素朴な問題ですが、具体的な契約法解釈論の根底にはこうした問題が存在しています。しかし、その答えは法律には書いてありません。学問領域にとらわれない視野をもって、自由と規制の関係を統一的に眺めてみたいと考えています。



公共政策学部 福祉社会学科
准教授 田所 祐史(たどころ ゆうじ)

〈主な研究領域〉
社会教育学、社会教育史

公民館をはじめとする地域の社会教育施設は、暮らしや住民自治を支える重要な教育機関です。これらが官民双方でどのように希求・構想され、実際に展開してきたのか、日露戦後から公民館が誕生する占領期・戦後に至るまでの歴史を研究しています。また、地域の公民館で社会教育主事として働いてきた経験から、公民館と地域や福祉との関係についても関心があり、京都府をはじめとする各地の実践とつながりたいと思っています。

各学部・研究科の取り組み

文学部

研究成果の地域への還元

—「丹後の村から見た戦争」と「大丹後展」
の企画に関わって—

歴史学科 小林 啓治 教授

文学部歴史学科は、これまで10年近く『京丹後市史』の編纂に協力してきました。現在は、ACTRを活用して史資料の保存と整理を続けています。こうした活動によって歴史遺産を後世に引き継いでいくことは、地域の自治と自立にとつてとても大事なことだと考えています。

私の専門である近代史料については、京丹後市には希有の質・量の文書群が残されています。それらのうち、昨年度はもっとも利用価値があると思われる「木津村役場文書」の目録を、院生の協力をえて解題をつけて刊行し、京丹後市教育委員会のWEBで公開しています。目録データそのものの公開は、全国的にみても先進的な取り組みと言えます。

今年度は、二つの取り組みを進めています。一つは、京丹後市「丹後古代の里資料館」と「網野郷土資料館」の2会場での、「丹後の村から見た戦争—村人と戦争」という展示です。展示のテ-

マおよびコンセプトの決定、展示物の選定、解説シートの作成などは、すべて教員・院生・京丹後市教育委員会との活発な議論にもとづいて行われました。

展示は7月25日から9月6日まで行われ、そのうち2日間は院生が解説を担当しています。展示の様子は、NHKニュース（京都放送局）や産経新聞で報道されました。

もう一つの取り組みは、12月5日から1月17日まで京都文化博物館で開催予定の「大丹後展」です。これについては、昨年から関係する歴史学科の教員が実行委員会に参加して、展覧会のプロットを作り、図録に掲載する解説や展示のキャプションも分担しています。また、会期中に院生による解説も企画しており、そのための準備を進めているところです。こうして研究や教育の成果が地域に還元されていくことを通じて、また新たな課題も発見されていくという好循環が生まれてきています。



丹後古代の里資料館での展示解説の様子

公共政策学部

研究紹介

「地方創生時代に一番必要なのは、地域公共人材（ひと）」

公共政策学科 杉岡 秀紀 講師

最近地方公務員が主役となって地域を元気にしたり、地域住民が立ち上がって地域づくりを展開したりする映画やドラマが増えました。たとえば『県庁おもてなし課（2013年）』『ナポレオンの村（2015年）』は前者の好例ですし、後者であれば『人生いろどり（2012年）』『WOOD JOB（2014年）』『限界集落株式会社（2015年）』などがその例になります。



また、『地域に飛び出す公務員ハンドブック』（椎川忍、今井書店、2012年）や『地域公務員になろう』（稲継裕昭、ぎょうせい、2012年）、『地域公共人材をつくる』（今川晃編著、法律文化社、2014年。筆者も分担執筆）など、今までの公務員の枠を越えて活躍する自治体職員を後押しする出版やアワードも相次いで登場しています。

私の研究対象はまさにここにあります。すなわち、一つは地域に飛び出す地方公務員を中心とする「地域公共人材（ひと）」に関する人材育成の研究であり、もう一つはそうした人材が活躍する「自治体（まち）」に関するまちづくり研究になります。

2014年に発表された元岩手県知事／総務大臣である増田寛也氏（本学客員教授）によるいわゆる「増田レポート」は、いよいよわが国は少子高齢化問題だけでなく、自治体消滅の危機に瀕していると警鐘を鳴らしました。この賛否については諸説ありますが、ともあれ、現在全国の自治体でまちの「人口ビジョン」「まち・ひと・しごと総合戦略」について本格的な検討が始まっているのは周知の事実です。

こうした中で重要なのは、やはり「人材（ひと）」だと思います。というのも、その計画や戦略を作るのも「ひと」ですし、また、どれだけ素晴らしい計画や戦略を作っても、それを実行するのは「ひと」、そして、その影響を受けるのもやはり「ひと」だからです。そういう人材を教員一人で作ることは可能でしょうか？答えはもちろん否です。翻って、できることはそうした地域公共人材が育つ環境を創造するきっかけづくりや支援—これだけになります。しかし、ここに大学の重要な意味が出てきます。すなわち私にとっての研究とは生きた教育と不可分であり、これこそがまさしく私が臨床政策学者を標榜することに他なりません。

生命環境科学研究科

腸内細菌叢

—我々の体には細菌による生態系が作られている—

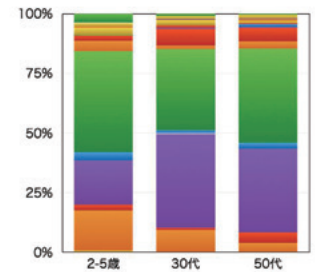
応用生命科学専攻 動物機能学研究室 井上 亮 講師

腸内細菌叢という言葉をご存知でしょうか。腸内細菌叢とは、腸の中にある細菌の集まりのことを指します。時折、テレビの情報番組や美容・健康雑誌などでも取り上げられているのでご存知の方もいるかもしれませんが、我々ヒトを含む全ての動物の腸内には細菌が棲んでいて、腸内細菌叢を形成しています。これは細菌の種類にして500種類以上、数にして370兆個にもなる一つの立派な生態系です。つまり我々は体の中に細菌による一つの生態系を住まわせているのです。ちなみに、370兆個という数は我々の体を構成する全細胞の約10倍で、我々の体重のうち1-2kgは腸内細菌叢が占めていると言われています。

このような膨大な数の細菌が、我々の健康に影響しないはずはありません。古くから、下痢や便秘などのお腹の病気に腸内細菌叢が関係することが知られていましたが、近年になって肥満や糖尿病、果ては精神疾患にまで腸内細菌叢が関係することが明らかになってきました。

我々の研究室では、この腸内細菌叢がどのように我々の健康に関わっているかを調べています。例えば、ある疾患の患者さんの腸内細菌叢では、健康なヒトの腸内細菌叢に比べてある種の細菌が極端に増えたり、減ったりしているのですが、この増減が何故病気に結びつくかを調べています。また、崩れた腸内細菌叢のバランスを整えるために有効な方法、具体的にはそういったことができる機能性食品の探索や評価も行っています。一方で、腸内細菌叢というのは一度形成されてしまうとなかなか大幅に構成を変えることが難しいことがわかっていますので、腸内細菌叢が形成される過程を調べて（図）、疾患になりにくい腸内細菌叢を作るにはこういった要素が大事なのかも検討しています。

我々の研究を通じて、肥満や糖尿病、精神疾患といったいわゆる現代病を少しでも減らすことができればと考えています。



腸内細菌叢の年代別構成
(異なる色がそれぞれ違う細菌の種類を示している。
下側のオレンジ色は善玉菌として有名なビフィス菌)

生命環境科学研究科

住民とともに進める災害に強いまちづくり

環境科学専攻 砂防学研究室 三好 岩生 助教

最近、「防災」という言葉を目にするのが多くなりました。地震、火山噴火、洪水、地すべり、土石流。自然災害が毎日のように報道されています。旧来、砂防学研究室では山地・森林での土砂と水の移動機構や、災害を未然に防止するための土砂移動制御について研究してきました。しかし、昨今の自然災害の多発や東日本大震災で目の当たりにした巨大な自然の驚異を考えると、土砂災害に対しても土砂や水の動きを制御するだけでは十分な「防災」とは言えません。普段からの土地利用の工夫やいざという時の避難行動などの、いわゆるソフト対策の重要性がますます大きくなっており、それらが必然的に研究対象に加わりました。

一昨年度から宇治市の炭山地区というところで、住民のみなさんとともに自主防災活動に取り組んでいます。関係する自治体も積極的に協力しています。ここでは、従来の行政主導の取り組みでは不可能であった、住民ならではの情報を盛り込んだ「マイ防災マップ」や「マイ防災プラン」を作成し

たり、ときには住民のみなさんと一緒に道路に倒れそうな危険木を伐採したりしています。この取り組みはテレビや新聞でも取り上げられ、京都府庁等で地域防災行政のモデルケースとされるなど、各方面から注目されています。今年度はこの地区の外にも京都府内外の4地区で自主防災活動とともに進めています。

このような取り組みは、あくまでも住民の主体的な行動が基本ですが、行政のバックアップや専門家の協力も必要不可欠です。学術的な側面から見ると、社会学的な知見や政策的考察も必要な学際的課題ですが、まずどこが、どんな時に危ないのかという基礎的な情報については土砂や水の動きを知ることが重要であり、砂防学分野の研究が活かされます。これからは自然を制御するのではなく、自然と共生するための知恵が重要と考えています。



住民のみなさんとワークショップ形式での「マイ防災マップ」作成の様子

話題の研究—プレスリリースから—

■免疫疾患の予防・治療へ

乳酸菌の免疫刺激メカニズムの解明

～乳酸菌の一本鎖 RNA は免疫を発動する主要成分～

生命環境科学研究科動物機能学研究室 井上亮 講師、牛田一成 教授らとコンビ株式会社（代表取締役社長 五嶋 啓伸）ファンクショナルフーズ事業部は、共同で乳酸菌の免疫刺激メカニズムの一端を解明し、米国で出版されているオンライン版の学術誌「PLOS ONE」(プロスワン) <http://www.plosone.org/> で 6月17日(米国時間)に公開されました。さらに本研究に関連する特許「特許第5690270号」,「Patent No.:US 8765706 B2」も取得しました。

乳酸菌は、様々な免疫疾患への予防・治療効果が期待されており、乳酸菌・免疫という研究分野において大変意義のある成果です。

■筋力・運動能低下の予防・改善へ

運動によって筋肉で起こる代謝変化の解明；筋肉代謝の活性化のスイッチを発見

生命環境科学研究科分子栄養学研究室は、静岡県立大学食品栄養科学部栄養化学研究室と共同で、運動時の筋肉における代謝の一端を解明し、米国で出版されているオンライン版の学術誌

「PLOS ONE」(プロスワン) <http://www.plosone.org/> で 6月26日(米国時間)に公開されました。

本研究成果は、スポーツ科学として、運動持久能力を向上させるためのサプリメントや機能性食品の開発につながる可能性があります。また、筋肉の活性化と密接な生活習慣病や加齢によって生じる筋力・運動能低下(ロコモティブシンドローム)の予防・改善のための研究につながります。

■植物病害に対する新規農薬開発へ

植物病原性カビの細胞周期を制御する遺伝子を発見

生命環境科学研究科植物病理学研究室の久保康之 教授、深田史美 日本学術振興会特別研究員(博士後期課程2回生)の研究グループは、植物病原性カビの感染過程において細胞周期のG1期からS期への進行を制御し、感染成立に必須である因子の発見に成功しました。この研究成果は、世界的な植物科学専門誌「The Plant Cell」の8月28日付けの電子ジャーナル版 <http://www.plantcell.org/content/early/2015/08/28> に掲載されました。

この成果により、世界中で深刻な被害をもたらしている植物病害に対する新規農薬の開発に貢献することが期待できます。

イベント情報

平成27年度桜楓講座(秋の部) <京都府立大学法人連続講座>

最近のトピックスを交えながら、本学教員がそれぞれの専門分野についてわかりやすく講義を行います。

Cコース 11月7日(土) 10:00～12:00

「宣教師が聞いたミヤコのことば」

講師：文学部准教授 岸本 恵実

Dコース 11月21日(土) 10:00～12:00

「気候に親しむ風土の建築の知恵」

講師：生命環境科学研究科准教授 長野 和雄

場 所：京都府立大学

合同講義室棟3階 第3講義室

受 講 料：無料(申込制)

募集期間：Cコース 10月30日(金)まで

Dコース 11月13日(金)まで

申 込 先：〒606-8522(住所記入不要)

京都府立大学企画課

FAX：075-703-4979

E-mail：kikaku@kpu.ac.jp



京都府立大学文学部 国際京都学シンポジウム「ジャポニズムの京都—世界を魅了した明治の工芸」

日 時：12月19日(土) 13:00～16:35

内 容：基調講演「明治の工芸に魅せられて」

村田 理如(清水三年坂美術館 館長)

報 告「欧米人旅行者が憧れた京都の工芸」

野口 祐子(京都府立大学文学部 教授)

「並河靖之の七宝と庭園」

武藤 夕佳里(並河靖之七宝記念館 主任学芸員、京都造形芸術大学日本庭園・歴史遺産研究センター 研究員)

「近代京都の美術工芸と世界」

並木 誠士(京都工芸繊維大学大学院デザイン・建築学系 教授、同大学美術工芸資料館 館長)

トークセッション「明治の京都から学ぶべきこと」

場 所：京都府立大学

稲盛記念会館1階104講義室

定 員：200名(先着順)

参加無料・事前申込不要

主 催：京都府立大学文学部

共 催：京都府立総合資料館

京都工芸繊維大学美術工芸資料館

京都府立大学地域連携センター

問合せ先：京都府立大学文学部

TEL 075-703-5117